

## シェイクスピア『冬物語』における自然・人工と錬金術

### Nature, Art and Alchemy in Shakespeare's *The Winter's Tale*

森 ゆかり

Yukari MORI

**Abstract** The purpose of this paper is to refute the Hermetic interpretations of Shakespeare's late Romance, *The Winter's Tale* (1611) by Frances Yates (1975) and Sorensen (1999). Newman's detailed study (1991, 1998, and 2004) on the "Nature" vs. "Art" distinction dating back to the classical antiquity shows that the alchemical defenses of *The Book of Hermes* abolished the "Nature" vs. "Art" distinction, while more conservative traditions sided on the "Nature's" superiority to "Art." In *The Winter's Tale*, Shakespeare always defends the conservative traditions and maintains the distinction between "Nature" and "Art, through the words, actions and, to mention the last but not the least, the patience by the characters in the play, Perdita, Paulina, and Hermione. All of them in the plot positively contributed to the final rapprochement and to the fulfillments of the God's oracles. Shakespeare parodies the Hermetic traditions and shows that "Art" never transcends "Nature" by his controversial "statue scene," whereby the real Hermione descended from the pedestal. Not the humans but only the God transcends the "Nature" vs. "Art" distinction to lead the broken families to the final salvation.

#### 1. 問題提起 — 『冬物語』と錬金術—

William Shakespeare (1564-1616) 晩年のロマンス劇である『冬物語』について、医師で占星術師でもあったサイモン・フォーマン (1552-1611) は、1611年5月15日の日記に、グローブ座でこれを観劇したことを記録している。<sup>1)</sup>フォーマンの芝居好きは有名で、シェイクスピアの作品は、この他『マクベス』、『シンベリン』なども観劇しているらしいことが自身の日記に残されている。<sup>2)</sup>

決して裕福な境遇ではなかったフォーマンが、オックスフォード大学の貧しい給費生を経て、1591年、ロンドンで医師として開業、ペスト流行時には、大勢の医師が医療活動を放棄して郊外に避難するなか、市中に留まり治療活動を継続したのはよく知られたところである。しかし、こうした彼の行動が、同業者の妬みを買うことになり、魔術や無認可診療等の容疑で相次いで逮捕、収監されることとなる。もっとも、こうした逆境にあってもフォーマンは医師としてその評判を次第に確立し、1603年にはケンブリッジ大学から医学博士の学位を

授与されて、『冬物語』を観劇する最晩年には、その名声も絶頂に達していたとされる。<sup>3)</sup>多忙を極める医療活動、魔術・占星術コンサルタントの合間、フォーマンは密かに天使との会話を試み、本格的な設備を使った錬金術実験まで行っており、その手稿には、失敗に帰した各種実験が、詳細に記録されているという。近年、TraisterとKassellは、フォーマンが残したこれら手稿を詳細に分析、彼の魔術・錬金術実験の全容が、次第に明らかにされつつある。<sup>4)</sup>

他方、フォーマンが観劇した『冬物語』、『シンベリン』をはじめとするシェイクスピア晩年のロマンス劇についても、モチーフにおける魔術・錬金術との関連を指摘する研究者が存在することは注目に値する。フォーマンが観たシェイクスピア作品のモチーフに共通して、魔術・錬金術が見え隠れするのは、フォーマン自身の関心が無意識のうちに反映しているためでなのであるだろうか？

シェイクスピア晩年のロマンス劇、特に『シンベリン』、『あらし』と錬金術との関連を最初に指摘したのは、ワールブルク研究所の碩学、フランセス・イエイツである。しかしながら、『シェイクスピア最後の夢』で、イエイツは、『冬物語』と錬金術の関連について、後期のロマ

ンス劇一般として言及するのみで、その詳細について論考していない点、問題を残すといえる。

イエイツが後世の課題として残した、『冬物語』における錬金術の関係を、纏まった形で論考した研究に、Sorensenの博士論文がある。Sorensenの博士論文では、『冬物語』のプロット展開におけるヘルメス主義の影響を分析するが、錬金術伝統としてのヘルメス主義の理解自体が不十分であるために、Sorensenがいうヘルメス主義のモチーフが、本当にヘルメス主義に特有なものなのか、それとも単に錬金術伝統に共通して見られるものであるのかの判断が、必ずしも正確でない点でも、分析上問題を残すといえる。

本論考では、まず、『冬物語』に繰り返し現れ、従来研究者が膨大なページを割いて論考した「自然」と「人工」の論争モチーフが、<sup>5)</sup>ヨーロッパ錬金術伝統においてどのような意義を担うものであったのかを、近年急速に進展しつつある近世錬金術研究、特にNewman及びDaston and Parkの研究に照らして考察する。次に、ヘルメス主義を使って、『冬物語』を晩年のロマンス劇の中に位置づけしようとするイエイツ、また、プロット展開全体をヘルメス主義で説明しようとするSorensenの見解が必ずしも適切でないことを論証したいと思う。なぜなら、ヘルメス主義は、錬金術を弁護するため「自然」と「人工」を峻別しない立場を採るが、『冬物語』のプロット上、最終的な和解と救済につながる決断と行動をとった人々の口を借りて繰り返し主張されるのは、上述のヘルメス主義とは正反対の、「自然」と「人工」を峻別する見解であって、身勝手な思惑や嘘、そして罪を犯す人々が口にするのは、ヘルメス主義に典型的な、「自然」と「人工」を峻別せず、「人工」が「自然」を超越することも可能であるとする立場なのである。

Newmanの研究によると、シェイクスピアと同時代人のフランシス・ベーコンは、ルネサンス科学思想を展開する際、ヨーロッパ中世錬金術伝統を引き継ぎ、「自然」と「人工」を峻別しない立場を採用したとする。これに対し、Daston and Parkは、シェイクスピアの『冬物語』が、ベーコンとは異なり「自然」と「人工」を峻別し、シェイクスピアが「自然」と「人工」を巡る論争に関して、むしろ保守的立場をとったことを指摘する。<sup>6)</sup> 本論文では、以上を踏まえて、『冬物語』のプロットを、イエイツやSorensenのように、ヘルメス主義を使って解釈するべきではなく、むしろヘルメス主義のアンチテーゼとして解釈するべきであることを論考することにする。

## 2 『冬物語』における「自然」と「人工」

『冬物語』で、「自然」と「人工」の関係を詳細に論

じたのは、第4幕第4場、羊の毛刈り祭の場面である。妻ハーマイオニと、幼馴染のボヘミア王ポリクシニーズの関係に疑ったシチリア王リオンティーズは、激情にかられて王子と王女パーディタの出生をも疑い、王子は死亡、まだ乳飲み子だったパーディタは、ボヘミアの荒野に置き去りにされる。幸い彼女は羊飼いに拾われて、16年もの間、羊飼いの娘として養育されるのだが、このパーディタと、息子のフロリゼルが恋仲になったという噂を聞きつけた父王ポリクシニーズは、様子を探るため、変装して羊の毛刈り祭にやって来る。ここで、やはり祭の女王フロラに扮したパーディタとポリクシニーズが、「自然」と「人工」をめぐる以下のやり取りをする。少し長いが引用してみよう。

パーディタ：...この季節のいちばん美しい花は、不実の花カーネーションと、自然の私生児とも呼ばれる縞石竹でしょうが、あのような花は私どもの庭には咲いていませんし、私も一茎だってほしいとは思ったことさえありません。

ポリクシニーズ：娘さん、どういうわけであの花をさげすむのだな？

パーディタ：あの赤と白とのまだら模様は、偉大な造化の自然に人工の手が加わってできたもの、と聞いておりますので。

ポリクシニーズ：それはそうかもしれぬ。だが、なんらかの手を加えて自然がよりよくなるとすれば、その手を生み出すのも自然なのだ。したがって、自然にたいして加えたあなたの言うその人工の手も、実は自然の生み出す手に支配されているのだ。いいかな、野育ちの幹に育ちのいい若枝を嫁入らせることによって、卑しい木に高貴な子を宿らせることがあるだろう、これは自然のたりないところを補う、と言うより、すっかり変えてしまう人工の手だ、しかし実はその人工の手そのものが自然なのだ。

パーディタ：そうですね、たしかに。

ポリクシニーズ：であれば、あなたの庭に縞石竹を咲かせ、自然の私生児などと呼ばなければいいだろう。

パーディタ：でも私は一茎だってあの花を植えるために土を掘る気はありません。この顔に紅白粉を塗って、それがきれいだというそれだけの理由で、このかたに子供を宿してほしいと言われたくないのと同じです。<sup>7)</sup>

偉大な「自然」に「人工」の手が加わってできた「縞石竹」は、レオンハルト・フックスが、1543年に出

版した『新本草』にも、赤と白、赤と白の縞のカーネーションが収録されており（図1参照）、この「縞石竹」について、パーディタは、これを「自然」の私生児と呼んで、「人工」を「自然」に劣ったものとするのに対し、ポリクシニーズは、「人工」は、「自然」を改良・補完することが可能であって、「自然」を改良・補完する「人工」は、それ自体がすでに「自然」に他ならないとする。パーディタは、「自然」と「人工」を峻別し、ポリクシニーズは、この両者の区別を廃する立場を採っていることが明白であるが、「人工」が「自然」を改良・補完することが可能であるのかどうか、また、それが可能であるとするならば、「自然」を改良・補完する「人工」は、それ自体「自然」なのか、あるいは「人工」のままであって、決して「自然」たり得ないとするのか、を巡る論争は、古典古代にその起源を持つ。以下のセクションでは、この論争の起源を古典古代に見ることにしよう。

### 3 古典古代における「自然」と「人工」

前述のように、『冬物語』における「自然」と「人工」をめぐる論争の起源は、これを古典古代に遡ることが可能であり、後に、アラブ世界を経由して中世、近世ヨーロッパで連綿と受け継がれていく錬金術を巡る論争と密接な関係を持つことになる。

まず、「自然」と「人工」を峻別する立場を古典古代の起源に遡ってみよう。自然物は、それ自身のうちに運動と静止の原理を持ち、人工物は内在的な変化の衝動を持たないとしたのは、アリストテレス『自然学』第2巻第1章であって、これ以降、「自然」と「人工」を峻別する、全ての議論の典拠とされている。長くなるが、「自然」の定義を以下に引用する。

これら〔自然的に存在するものども〕の各々は、それ自らのうちにその運動および停止の原理〔始動因〕をもっている。そして、その或るものは、場所的意味での運動および停止の原理であり、あるものは量の増大・減少〔成長・萎縮〕の意味でのそれであり、或るものは性質の変化の意味でのそれである。... すなわち、或るものの「自然」とは、これ〔自然〕がその或るものうちに第一義的に・それ自体において・そして付带的ではなしに・内属しているところのその或るものの運動または静止することの原理であり原因である、...。<sup>9)</sup>

これに対しアリストテレス上掲書は、「人工」について以下の様に定義して、「自然」と峻別する立場を採る。

これに反して、寝台や衣やその他この類のなにものものであろうと、たまたまそう呼ばれているその名前のものであるのかぎりのすべては、すなわち技術によって存在するものとしてのかぎりのすべては、それ自らのうちに転化へのなんらの衝動をも植えつけられていない、...。...これらのもの（制作されるもの）はいずれもその制作の原理をそれ自らのうちにはもっていないくて、（1）その或るものは、たとえば、家とかその他およそ人間の手で作られるものはその制作の原理を他のものの中に、そのもの自らの外に、もっており、また（2）他の或るものは、それ自らのうちに原因をもっているが、それ自体においてではなしに、そのもつ付帯性のゆえにたまたま自らが自らにとって原因となるようなものどもである。<sup>9)</sup>

この「自然」と「人工」の弁別方法をもう少し分かりやすく説明するのに、アリストテレスは、「寝台」の例を使っている。すなわち、もし、誰かが、技術によって存在するようになった「人工物」である「寝台」を植えて、その朽木が発芽したとしても、そこに生えるのは「人工物」としての「寝台」ではなくて、「自然物」としての「木」であるにちがいないというのである。<sup>10)</sup>

プラトンも、『法律学』において、峻別されるべき「自然」と「人工」について、「自然」は、「人工」を超えるものであるとする。「自然」優位の見解である。少し長くなるが、後述する『冬物語』の彫像場面とも関連して重要になるので、まとめて引用してみよう。

それらのなかで最大最美のものは、自然と偶然とがつくり出すのであって、技術（人工）がつくり出すものは、これより小さなものらしいですね。つまり、技術は、自然が最初に仕上げた大きな仕事を自然から受け取って、これに加工したり、その形を整えたりするのであって、その作り出すものはすべて比較的小さなものに過ぎないというわけです。わたしたち誰もが「人工品」と呼んでいるものがまさにそれなのですが、... 技術の方は、後になって、それらの自然物から、二次的なものとしてうまれてきたのであり、真実性をまるっきり持たないものであって、技術そのものと同属の、何か影のような存在なのである。たとえば、絵画や、音楽や、その他これらと同列の地位にある諸技術がつくりだすものがそれである。<sup>11)</sup>

プラトンは、「自然」が作り上げた仕事があってはじめて、「人工」が成立するのであるから、「人工」が「自

然」を超えることはないとする。プラトンが『法律』の上記箇所でも説明した「自然」と「人工」の関係を応用すれば、「自然」から二次的に生まれた「人工」である、例えば「建築」技術を、さらに「絵画」で映し出した、マントヴァのテ宮殿に残るジュリオ・ロマーノの「騙し絵」などは、「自然」から、二段階で隔たった「影」の「影」に過ぎないものとなるはずである。この点についてはセクション6で詳述する。

さて、話しをアリストテレスに戻そう。アリストテレスにおける「自然」と「人工」の関係について、注意を要するのは、アリストテレスが、後述のアヴィチェンナほど「自然」と「人工」の区別を厳格にしていないという事実である。<sup>12)</sup> アリストテレスのこの曖昧な立場のために、中世以降、「自然」と「人工」の区別について、これを厳格に区別する立場と、この区別を廃する立場の双方に対し、アリストテレスがそれぞれに典拠を提供することになるのである。アリストテレスが、「自然」と「人工」の区別に関し、これらを必ずしも厳密に峻別するとは限らないと考えられるのは、『政治学』と『自然学』に以下の2つの箇所が存在するからである。

技術や教育はどのようなものにせよ、自然のし残したことを補充するのを目的とする。<sup>13)</sup>

『自然学』における類似の主張は、以下の通りである。

一般に、技術は、一方では、自然がなしとげえないところの物事を完成させ、他方では、自然のなすところを模倣する。<sup>14)</sup>

アリストテレスが展開した、「人工」が「自然」を完成・補完することも可能であるという上記の主張は、後に『ヘルメスの書』をはじめとする錬金術弁護の典拠となり、以後の「自然」対「人工」論争において重要な役割を果たすことになる。

#### 4 中世錬金術伝統における「自然」と「人工」

さて、こうした古典古代の伝統を踏まえ、アラブ世界では、アヴェロエスもアヴィチェンナも「自然」と「人工」が同じ結果を生成することは不可能であるとし、<sup>15)</sup> 「自然」と「人工」を峻別した。こうした「自然」と「人工」を峻別する立場を、Newmanの*Promethean Ambitions*に倣い、保守派と呼ぶことにする。<sup>16)</sup> 中世ヨーロッパにおける「自然」と「人工」をめぐる論争は錬金術の可能性をめぐる論争と密接に結びついており、「人工」は、「自然」に劣るとした、<sup>17)</sup> 保守派アヴィチェンナの著作

である*De congelatione*が、1200年頃に、イングランドのAlfred of Sareshelによってラテン語に翻訳された際、たまたまアリストテレスの*Meteorology*第4巻に挿入されたため、<sup>18)</sup> 以後、アヴィチェンナのこの著作がアリストテレスのものであるとされ、これを典拠として、大アルベルトゥス、トマス・アクィナス、ボナヴェントゥーラ等の「自然」と「人工」を峻別する保守派伝統に受け継がれることとなる。<sup>19)</sup>

例えば、トマス・アクィナスは、『神学大全』において、錬金術や人工による生成物を、自然物に劣ったものであるとし、「自然」がsubstantial formを付与するのに対して、「人工」がこれを付与することはなく、「人工」の力は「自然」の力より弱いものであり、バラ香水や錬金術の蒸留によって得られた水は、天然水のもつ純粋なsubstantial formを欠くとした。<sup>20)</sup> このトマスの立場は、スペインの魔女裁判で重要な役割を果たしたアヴィラ司教Alonso Tostado (c.1400-1455)にもその例を見ることができ、錬金術師は天然金を生成できないばかりでなく、天然金のもつ偶有的性質を全て兼ね備える模造品を生成することさえ不可能であるとした。<sup>21)</sup>

これに対し、錬金術が自然界を変えることのできる人間能力の象徴であるとする伝統も存在する。<sup>22)</sup> この少数派の伝統は、「人工」を使って、「自然」の生成物を複製することが可能であるばかりか、錬金術により新しい物質を生成することさえも可能であるとするのである。<sup>23)</sup>

この伝統を代表するのが、ヘルメス主義の『ヘルメスの書』であり、『ヘルメスの書』は、「自然」と「人工」が本質上異なるものを生成するとする保守的見解を否定し、自然物と人工物は生成の手段が異なるにしても本質の点では同一であり、<sup>24)</sup> 「自然」と「人工」の区別は、経験的に決められるものであって、「自然」と「人工」の間に相互不可侵の壁が存在する訳ではないとした。<sup>25)</sup> 錬金術を弁護する『ヘルメスの書』では、保守派が、自然物と人工物は相異し、金属は地中でしか生成されず、生成にかかる時間は人間にとって知ることのできないものであるとする意見に対して、雷と火打石の火は、手段はちがっても、同じ火であり、卵の孵化も、母親の体内だけではなく、人工的な手段の可能性もあり、更に議論を進めて、人工のものが自然のものに勝る可能性をも認めているのである。<sup>26)</sup>

また『ヘルメスの書』において特に注目すべきは、野生の木も、接木による苗も、共に木であって、「自然」が「人工」を助けるのであるとしている点である。<sup>27)</sup> これは『冬物語』第4幕第4場の「自然」vs.「人工」論争に関して、接木による「人工」を「自然」として弁護するポリクシニーズの見解そのものである。『ヘルメスの

書』以降の錬金術師は、実験室工程によって自然界には存在しないものを生成した場合、この生成物が自然的なものに見做されると主張しており、<sup>28)</sup> 錬金術を弁護するGeberも、天然金属と人造金属の間に本質上の相違はなく、製造方法の相違があるのみだとしているのである。<sup>29)</sup>

## 5 ルネサンス科学における「自然」と「人工」

中世を通じて「自然」と「人工」を峻別する大アルベルトゥス、トマス・アクィナス、ボナVENTOURA等、保守本流と、「自然」と「人工」の区別を廃する錬金術伝統が並列する形で存在したが、後者は、ルネサンス期に入ると新たな科学思想発展に多大な貢献をすることになる。この間の遷移を、イタリア及びイングランド・ルネサンス思想家を例に挙げて辿ってみよう。

イタリア・ルネサンスの偉大なパトロンであるコジモ1世は、ヴェッキオ宮に植物蒸留や錬金術のための実験室を設置していたとされるが、このコジモ1世に仕えていた哲学者で詩人のBenedetto Varchi (1503-1565)<sup>30)</sup> は、『ヘルメスの書』と同様、火を例に挙げて、人工の火も自然の火も同じ効果をもたらすのであるから、同じspeciesを持つとし、自然も錬金術も同じ原料、同じ火を用いるのであれば、自然物も人工物も同じであり、「人工」は「自然」の手段に他ならず、「自然」と「人工」の境界を廃し、真の錬金術で生成された金は、人工ではなく、自然の生成物であるとした。<sup>31)</sup>

一方、イングランドに目を移すと、やはりシェイクスピアと同時代人のJohn Case (d. 1600)が、中世錬金術伝統を、ルネサンス科学思想のフランシス・ベーコンに繋ぐ要の役割を果たしたことに注目すべきである。ケースは、「人工」は「自然」を完成するものであって、錬金の可能性を認める立場を採る。しかしながら、ケースは、「人工」は「自然」が提供した材料を利用できるのみであって、「人工」は、利用できる材料の質によって、制約を受け、錬金が「人工」によって可能であるにしても、自然物を「人工」のみによって生成することはできない<sup>32)</sup>としている点で、中世保守派伝統と錬金術弁護の伝統の折衷的な立場を採っているともいえる。奇妙なことに、ケースは、「キャベツ」(!)の接木に言及して、「人工」が新しいspeciesを生み出し、このspeciesは、「自然」のものであると言うことが出来ると主張する。<sup>33)</sup>面白いことに、ベーコンも『ニュー・アトランティス』において、接木の例を挙げていることから分かるように、接木は16, 7世紀に発達した園芸技術であったため、<sup>34)</sup> シェイクスピアの観衆にも馴染み深いものであったと考えられる。

さてこうした遷移段階を経たのち、フランシス・ベーコンに目を移すと、「自然」と「人工」は、その形相や本質が相違するのではなく、作用因が相違するのみであると主張した上で、新たな科学思想を展開することになる。<sup>35)</sup>しかし、自然物と人工物の相違を形相ではなく、その生成法にあるとするのは、前述のように少なくとも13世紀の錬金術伝統に遡り、こうした錬金術伝統は更に遡って、アリストテレスによる、「自然」を完成するものとしての「人工」、すなわちperfective artの概念にまでその典拠を求めることができるものなのである。<sup>36)</sup>

このように16世紀後半から17世紀前半の"Wunderkammern"全盛時代には、ベーコン、デカルト等の自然哲学のように、「自然」と「人工」の区別が一層曖昧になっていくのであるが、<sup>37)</sup> 大多数のルネサンス著述家は、まだ「自然」は「人工」に優越するというパーディタの見解を採るのであるという。<sup>38)</sup>

次セクションでは、シェイクスピアもまたパーディタと同様、「自然」と「人工」をめぐる論争については、保守的な立場を採ることを、『冬物語』のプロット展開の中に位置づけ、その意義を検討することにした。

## 6 『冬物語』における「恩寵」

セクション2で、『冬物語』第4幕第4場の「縞石竹」をめぐるパーディタとポリクシニーズの論争を見たが、現代では辛うじて囚人服にその名残をとどめるにすぎない「縞」は、中世以来、ある一定のコノテーションを持つものであったことをパストゥローは指摘する。以下に少し長いが引用しよう。

こうして縞模様の衣装ないし品物によって頻繁に指示されるのは、なんらかの理由で社会秩序の外部に置かれたあらゆる者たちなのである。その理由は、断罪（文書偽造者、贋金作り、誓い破り、罪人）や障害（ハンセン氏病患者、賤民、知恵遅れ、狂人）であるとか、低級な仕事（召使い、下女）か不名誉な職業（旅芸人、売春婦、死刑執行人に加えて、悪魔的と見なされた鍛冶屋、残忍な肉屋、買い溜めをして飢饉の元凶になる粉屋という三種の嫌われた職業がしばしば凶像では結びつけられている）に従事しているとか、キリスト教徒ではない、あるいはキリスト教徒をやめた（イスラム教徒、ユダヤ人、異端）とかいったものであった。これらの者たちがいずれも社会秩序に反するのは、色彩と衣装の秩序を縞模様が攪乱するのと同断なのである。<sup>39)</sup>

パストゥローによれば、「縞模様」を含む紋章の大半は、

悪い紋章か否定的な紋章で、文学作品においては、不忠の騎士、王位篡奪者、出生に問題のある人物（私生児、平民）や、残酷で不法かつ冒険的な行動をする者すべてに、この種の紋章が賦与されているという。<sup>40)</sup>『冬物語』第4幕第4場で言及される縞模様の石竹は、後の場面で若い二人の結婚に反対するポリクシニーズにとっては、卑しい羊飼いの娘であるにもかかわらず、図々しくも王位継承者であるフロリゼルを誘惑しようと企てる（と誤解した）「パーディタ」を、また、嫉妬にかられたリオンティーズにとっては、妻ハーマイオニとポリクシニーズの間の不義の子「パーディタ」を、一方パーディタにとっての「縞石竹」は、若い二人を引き裂こうとする残酷で無作法な国王「ポリクシニーズ」と、本人はまだ真相を知らないにせよ、貞淑な母を疑い、神託を無視して、兄と母を死に至らしめ、当時まだ乳飲み子だった自分を追放した残酷で不法かつ冒険的な父王「リオンティーズ」を象徴する役割を担うことになるのである。

この場面の「人工」には、なにかしら胡散臭いものが漂う。Tylerも、この場面でパーディタが「人工」を欺き、偽りの模倣、女の化粧に結びつけて、「人工」を倫理的にも自然に劣るものとしたのは、リオンティーズの娘、パーディタが本来、「人工」ではなく、「自然」による女王であり、「人工」の腐敗を免れている「自然」を象徴しているからなのであるとする。<sup>41)</sup>

シェイクスピアが、『冬物語』において、中世錬金術伝統に遡る「自然」と「人工」の区別を廃し、「人工」が「自然」を超えることさえ可能であるとする立場に懐疑的態度を採っているのが明らかなのは、上記の「縞石竹」の場面ばかりではない。王妃と王子を死に追いやった罪を悔いるリオンティーズに、王妃の忠実な女僕であるポーリーナが言う以下の台詞を見てみよう。

ポーリーナ：... かりに陛下が、世界じゅうの女一人一人と結婚され、その人たちすべてからいいところだけおとりになって、一人の完全な女をお作りになっても、あなたが殺したあのかたにおよばないでしょう。<sup>42)</sup>

このポーリーナの台詞には、古典古代の典拠がある。キケローが伝えるところによると、ギリシアの芸術家ゼウクシスは、トロイのヘレンの肖像を描くよう依頼を受けた時、5人の乙女をモデルにして、それぞれ一番美しい特徴を選び出して、自然に存在する美よりももっと美しい女性の肖像を描き上げたという。<sup>43)</sup>

ポーリーナのこの台詞は、この古典古代からの伝統的トポスを謂わば反転させて、「自然」の個物から「人工的」に抽出された美で合成された肖像は、「自然」に存

在する美であるハーマイオニ自身には適わないとあって、「自然」が「人工」に優越するとする保守派伝統を擁護する。

この「自然」優位の立場を最も逆説的に表現したといえるのは、『冬物語』第5幕第3場における有名な彫像場面である。嫉妬に狂ったリオンティーズの怒りを避けるため、16年もの間、死んだものとされて身を隠して暮らしていた王妃ハーマイオニが、巨匠ジュリオ・ローマーノの彫像として夫リオンティーズの前に姿を現す。この間の経緯は、当事者ではなく人々の口を借りて以下のように説明される。

紳士3：いや、姫君がポーリーナ様ご所蔵の母上の彫像のことをお聞きになりーそれはイタリアの巨匠ジュリオ・ローマーノが長い歳月をかけて製作し、やっこのほど完成したものだが、ローマーノ自身、自分の作品に息を吹きこむ永遠の力が与えられていたら、造化の神を欺いてそのまねをしたいと言っているほど、ハーマイオニ様にそっくりのハーマイオニ様の像で、話しかければ返事をしてもらえそうだという。<sup>44)</sup>

毛刈り祭の女王フローラに扮したパーディタが、実は王家の娘であることが判明したのと同様、彫像として登場したハーマイオニが、生身のハーマイオニであったというプロットは、テイラーも、「自然」の模倣である「人工」自体が、「自然」であることが判明するという点で注目するが、<sup>45)</sup>これは、「自然」に超越する「人工」を擁護する伝統への強力なアンチテーゼとなっている。

「芸術」を「自然」に匹敵または超越する「人工」として擁護する伝統も、古典古代にその起源を持つ。プリニウス『博物誌』は、古代ギリシアの二人の画家の競い合いを以下のように伝え、「自然」に超越する「人工」を擁護する伝統的トポスの典拠とされている。

記録によると、この最後の人[パラシオス]はゼウクシスと技を競った。ゼウクシスはブドウの絵を描いて、それを大変巧みに表現したので、鳥どもが舞台の建物のところまで飛んで来た。一方パラシオス自身は、たいへん写實的にカーテンを描いたので、鳥どもの評決でいい気になっていたゼウクシスは、さあカーテンを引いて絵を見せよと要求した。そして自分の誤りに気が付いたとき、その謙虚さが賞揚されたのだが、自分は鳥どもを瞞したが、パラシオスは画家である自分を瞞したと言いながら、賞を譲ったという。<sup>46)</sup>

セクション3でも言及したが、プリニウスの上記トポスとは反対に、「自然」が「人工」に優越すると考えるプラトン『法律』に見られる論理をさらに展開すれば、仮に「絵画」が、「自然」から二次的に生まれた「人工」—例えば「建築」技術—を模倣するとしたら、この絵画芸術は、「自然」から、二段階隔たったものとなり、「影」の「影」に過ぎないものとなるはずである。シェイクスピアが『冬物語』第5幕第3場の「彫像」を、例えば、大理石の中に閉じ込められていた人間を解放としたミケランジェロの「彫像」ではなく、あえて「ジュリオ・ロマーノ」の「彫像」として描写しているのは興味深い。ジュリオ・ロマーノといえば、マントヴァのテ宮殿などに残る「騙し絵」でも有名なルネサンス万能人のひとりであるからだ。テ宮殿に残るジュリオ・ロマーノの「騙し絵」は、「自然」から二次的に生まれた「人工」である「建築」を、さらに「絵画」で映し出したものであり、その技術の巧みさのために、われわれは壁に描かれた建築装飾を現実のものであるかのように錯覚してしまう。<sup>47)</sup>シェイクスピアは、「自然」から言わば二段階に隔たった「影」の「影」に過ぎない「騙し絵」で有名な「ジュリオ・ロマーノ」を、この場面で持ち出し、プリニウスのトポスに、プラトンの一ひねりを加えて、「人工至上」のトポスを転倒させる。

しかしながら、シェイクスピアの「人工」には、単に「自然」に劣る否定的なものというよりは、もう少し重層的な意義付けが与えられているようだ。この点を巧みに批評したのは、種村季弘で、以下に関連箇所を引用してみることにしよう。

レオンティーズの悔悟のあと、あらゆる場面で実態と仮象のすり替えが演じられる。ここでは真から嘘が生じる（誤解）のではなくて、つぎつぎ嘘から真が生み出されて和解に到達するのである。仮象と嘘の腕飯振舞いであるボヘミアの春祭りでは、誰一人として本来の自分の正体を露わにして登場してくるものはおらず、ほとんど全員が変装して姿をヤツしている。さらに終幕の、パーディタ姫の真の素性が割れるきっかけはフロリゼルの嘘であり、ハーマイオニさえポーライナの嘘から出現してくる。真実はここではもはや嘘からしか出てこない。<sup>48)</sup>

Petersonもまた、オートリカスについて、利己的目的のために行動するが、これが図らずも「時」の道具となり、偽りと利己主義が図らずも「善」を生み出す<sup>49)</sup>としており、欺きと偽りに満ちた「人工」が、いわば「神」の救済計画によって変容していくことを指摘する。<sup>50)</sup>

様々な思惑、嘘の中であって、最終場面で2王家を和

解と救済へ導いていくのは、ポーライナと、16年の時を隔てた2つのカミローの忠節<sup>51)</sup>の行為であり、この二人の忠節が、「運のいい日にはよいことをしたいものだ」と言って、捨て子を引き取り養育した羊飼いの小さな愛の行為で繋がられて、<sup>52)</sup> 16年の歳月を紡ぎ、「縞石竹」をきっぱりと拒絶するパーディタの清廉と、若い二人の恋人、パーディタとフロリゼルが、「自然」と「人工」をめぐる論争を通して、嘘と身勝手な思惑が渦巻く「人工」ではなく、神の絶対的救済意思がそれを通して働くことになる「自然」を選び取ることを、ひとつひとつつんでゆくことにより、和解と救済への道が力強く整えられていくのである。また、この16年間をつなぐもうひとつの愛の絆は、母親として娘の無事と、妻として引き裂かれた2つの王家の回復を希望するハーマイオニの祈りであったことも忘れてはならないであろう。天は愛の行為により被造物を養うが、<sup>53)</sup> 嘘や偽りもまた、愛の行為で変容させられて、神は自らの救済計画を完遂する。

## 7 おわりに

本論考では、シェイクスピア晩年のロマンス劇である『冬物語』で、「自然」と「人工」をめぐる論争に関して、著者のシェイクスピアが、同時代人フランシス・ベーコンに代表されるような当時台頭しつつあった「自然」と「人工」の区別を廃し、「人工」が「自然」を優越することさえ可能であるという伝統ではなく、アヴィチェンナ、アヴェロエスに始まりトマス・アキナスに代表される「自然」と「人工」を峻別し、「自然」を「人工」の上位に置く保守的伝統に従っていたことを考察した。イエイツが指摘したように、『冬物語』において、魔術・錬金術の影を垣間見ることができるにしても、シェイクスピア自身は、『ヘルメスの書』に始まる中世錬金術伝統が主張し、近世科学思想萌芽期に引き継がれたともいえる「自然」と「人工」の区別を廃する立場を採らない。

罪によって引き裂かれた家族、王国に癒しと和解をもたらすのは、「人工」のもつ虚偽をさえ、御旨の実現に益するものに変容させ、「人工」につきものの虚偽を拒否する「自然」を通して顕現する、神の「恩寵」の働きのみである。また、この神の「恩寵」によってのみ、結果的に「自然」と「人工」の区別が廃されるのであり、人間レベルで「自然」と「人工」の区別を超越することは不可能であることを、「自然」である生身のハーマイオニを、ジュリオ・ロマーノの「人工物」の彫像として登場させ、「人工」から「自然」を生み出すことさえ可能であると主張するヘルメス主義の強烈なパロディーとなっている。

批評家が長年、その不自然さを指摘し、恐らく上演当

時も賛否両論があったことが想像に難くない彫像場面は、「自然」と「人工」論争に関して、保守的立場を採ったシェイクスピアにとって、かくあらねばならぬ、必然的なものであったのである。

(注)

- 1) Pafford, xxi-xxii. Traister, 28, 171. Kassell, 2.
- 2) Traister, 171.
- 3) 森 ゆかり, 72-73. フォーマンについては同論内の文献参照。
- 4) Traister 及び Kassell “The Food of Angels,” *Medicine and Magic* を参照。
- 5) 例えば、Tayler, Peterson, Hunt, Forker, 宮地等を参照。
- 6) Daston and Park, 264-265.
- 7) 『冬物語』IV.iv.81-103.小田島雄志訳、126-128.
- 8) アリストテレス『自然学』II.i.192b. 出 隆・岩崎允胤訳, 44-45.
- 9) アリストテレス『自然学』II.i.192b. 出 隆・岩崎允胤訳, 44-45.
- 10) アリストテレス『自然学』II.i.193a. 出 隆・岩崎允胤訳, 46.
- 11) プラトン『法律』X.4.889A-D. 森 進一・池田美恵・加来彰俊訳, 593-595. Close, 477 も参照のこと。
- 12) Newman, “Introduction,” 4.
- 13) アリストテレス『政治学』VII.xvii.1337a. 山本光雄訳, 325. Close, 473.
- 14) アリストテレス『自然学』II.viii.199a 出 隆・岩崎允胤訳, 75. Newman, *Promethean Ambitions*, 116, Tayler, 131 も参照のこと。
- 15) Newman, *Promethean Ambitions*, 41, 43.
- 16) Newman, *Promethean Ambitions*, 94.
- 17) Newman, “Alchemical and Baconian Views,” 86, Newman, *Promethean Ambitions*, 38.
- 18) Newman, “Introduction,” 2.
- 19) Newman, *Promethean Ambitions*, 94, 112.
- 20) 該当箇所は『神学大全』III.Q.66.Art 4, Ad quantum 等を参照。Newman, *Promethean Ambitions*, 94-95.
- 21) Newman, *Promethean Ambitions*, 97-99.
- 22) Newman, *Promethean Ambitions*, 47.
- 23) Newman, *Promethean Ambitions*, 112.
- 24) Newman, “Alchemical and Baconian Views,” 87.
- 25) Newman, *Promethean Ambitions*, 66.
- 26) Newman, “Introduction,” 11-12.
- 27) Newman, “Alchemical and Baconian Views,” 86.
- 28) Newman, *Promethean Ambitions*, 94.
- 29) Newman, *Promethean Ambitions*, 76.
- 30) Newman, *Promethean Ambitions*, 126, 132.
- 31) Newman, *Promethean Ambitions*, 138-139.
- 32) Schmitt, 547.
- 33) Schmitt, 547-548, Daston and Park, 264.
- 34) Schmitt, 548. Goldgar も参照のこと。
- 35) Newman, “Alchemical and Baconian Views,” 84, Newman, *Promethean Ambitions*, 138-139, 259. Daston and Park, 291.
- 36) Newman, “Alchemical and Baconian Views,” 85, Newman, *Promethean Ambitions*, 300.
- 37) Daston and Park, 260.
- 38) Daston and Park, 264-265.
- 39) パストゥロー, 26.
- 40) パストゥロー, 46-47.
- 41) Taylor, 133.
- 42) 『冬物語』V.i.13-16.小田島雄志訳、178.
- 43) Cicero, *De inventione* II.1.1. Newman, *Promethean Ambitions*, 17-18.
- 44) 『冬物語』V.ii.13-16.93-101. 小田島雄志訳、199.
- 45) Tayler, 135.
- 46) プリニウス 『プリニウスの博物誌』35.36. 65.中野定雄・中野里美・中野美代訳, III. 1421. Newman, *Promethean Ambitions*, 12.
- 47) Belluzzi and Forster, Figures 120, 137, 155 等を参照。
- 48) 種村季弘, 319.
- 49) Peterson, 190-191.
- 50) Tayler, 125.
- 51) Peterson, 186.
- 52) Peterson, 167.
- 53) Peterson, 167.

#### 引用文献

- アリストテレス 『自然学』出 隆・岩崎允胤訳 アリストテレス全集3 東京：岩波書店、1968年  
--- 『政治学』山本光雄訳 アリストテレス全集15 東京：岩波書店、1969年
- Belluzzi, Amedeo and Kurt W. Forster. “Guilio Romano, Architect at the Court of the Gonzagas.” *Guilio Romano*. Ed. Tafuri, Manfredo. et. al. Trans. Fabio Barry. Cambridge: Cambridge University Press, 1998. 90-128.
- Close, A.J. “Commonplace Theories of Art and Nature in Classical Antiquity and in the Renaissance.” *Journal of the History of Ideas* 30 (1969): 467-486.



- Daston, Loraine and Katharine Park. *Wonders and the Order of Nature, 1150-1750*. New York: Zone Books, 1998.
- Forker, Charles. "Negotiating the Paradoxes of Art and Nature in *The Winter's Tale*." *Approaches to Teaching Shakespeare's The Tempest and Other Late Romances*. Ed. Maurice Hunt. New York: The Modern Language Association of America, 1992. 94-102.
- Fuchs, Leonhart. *The New Herbal of 1543*. Complete Coloured Edition. Koln: Tashen, 2001.
- Goldgar, Anne. "Nature as Art: The Case of the Tulip" *Merchants and Marvels: Commerce, Science, and Art in Early Modern Europe*. Ed. Pamela H. Smith and Paula Findlen. New York: Routledge, 2002. 324-346.
- Hunt, Maurice. "The Three Seasons of Mankind: Age, Nature, and Art in *The Winter's Tale*." *Iowa State Journal of Research* 58 (1984): 299-309.
- Kassell, Lauren. "'The Food of Angels': Simon Forman's Alchemical Medicine." *Secrets of Nature: Astrology and Alchemy in Early Modern Europe*. Ed. William R. Newman and Anthony Grafton. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 2001. 345-384.
- . *Medicine and Magic in Elizabethan London Simon Forman: Astrologer, Alchemist, and Physician*. Oxford: Clarendon Press, 2005.
- 宮地信弘 「自然・人工・ピュグマリオンズム —『冬物語』における映像場面について—」 三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学 44 (1993): 95-110.
- 森 ゆかり 「ベン・ジョンソン『錬金術師』におけるサイモン・フォーマン」 『愛知工業大学研究報告』 37A (2002): 69-79.
- Newman, William R. "Introduction: Alchemical Debate in the Thirteenth Century The Defense of Art." *The Summa Perfectionis of Pseudo-Geber: A Critical Edition, Translation and Study*. Ed. William R. Newman. Leiden: E.J. Brill, 1991. 1-47.
- . "Alchemical and Baconian Views on the Art/Nature Division." *Reading the Book of Nature of the Scientific Revolution*. Ed. Allen G. Debus and Michael T. Walton Kirksville, Missouri: Sixteenth Century Journal Publishers, 1998. 81-90.
- . *Promethean Ambitions: Alchemy and the Quest to Perfect Nature*. Chicago: The University of Chicago Press, 2004.
- ミシェル・パストゥロー 『縞模様の歴史 —悪魔の布—』 村松 剛・松村恵里訳 東京：白水社、2004年
- Peterson, Douglas L. *Time Tide and Tempest: A Study of Shakespeare's Romances*. San Marino, California: The Huntington Library, 1973.
- プラトン 「法律」 森 進一・池田美恵・加来彰俊訳 プラトン全集 13 東京：岩波書店、1976年
- プリニウス 『プリニウスの博物誌 III』 中野定雄・中野里美・中野美代訳 東京：雄山閣、1986年
- Schmitt, Charles B. "John Case on Art and Nature." *Annals of Science* 33 (1976): 543-559.
- Shakespeare, William. *The Winter's Tale*. Ed. J.H. Pafford, London: Routledge, 1963.
- ウィリアム・シェイクスピア 『冬物語』 小田島雄志訳 東京：白水社、1983年
- Sorensen, Roger Dale. *Alchemy, Nature and Time in Pericles and The Winter's Tale*. Diss. The University of Texas, Dallas, 1999. Ann Arbor: UMI, 2000. 9961181.
- 種村季弘 『怪物の世界』 種村季弘のネオ・ラビリントス 1 東京：河出書房新社、1998年
- Taylor, Edward W. "Nature and Art in Renaissance Literature: Shakespeare's *The Winter's Tale*." *The Winter's Tale: Critical Essays*. Ed. Maurice Hunt. New York: Garland Publishing, Inc., 1995. 119-138.
- Traister, Barbara Howard. *The Notorious Astrological Physician of London: Works and Days of Simon Forman*. Chicago: The University of Chicago Press, 2001.
- フランセス・イエイツ 『シェイクスピア最後の夢』 藤田 実訳 東京：晶文社、1980年

(受理 平成18年3月18日)

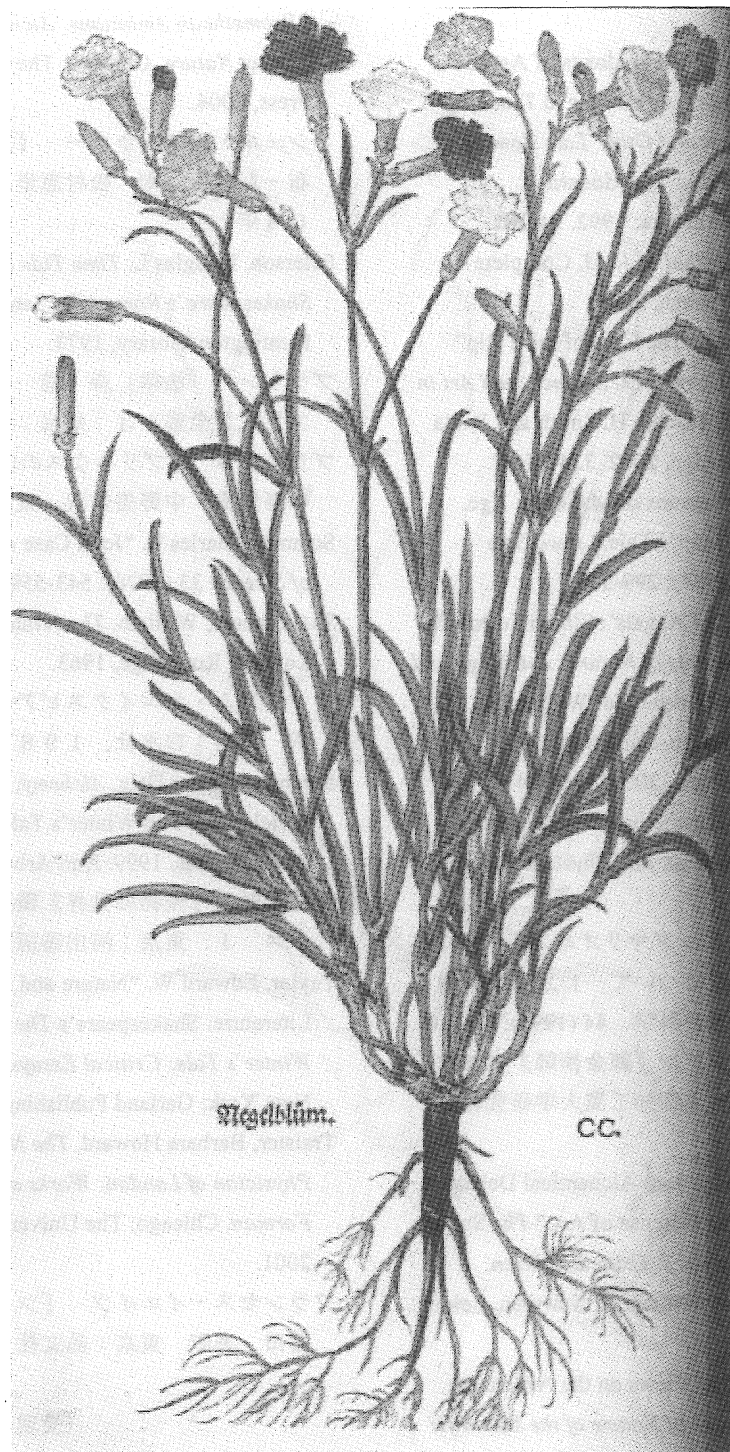


図 1: フックスの縞模様がついたカーネーション Illustration CC in Leonhart Fuchs. *The New Herbal of 1543*. Reproduced by courtesy of the Stadtbibliothek, Stadt Ulm, Germany.